

the People

元気なまちには 元気な主張を続け
元気に行動する 市民がいる

the people (ザ・ピープル)
2016年 4月発行

発行：特定非営利活動法人 ザ・ピープル
代表者：吉田 恵美子
所在地：福島県いわき市小名浜字蛭川南5-6
タウンモールリスポ内

TEL:0246-52-2511 FAX:0246-38-9538
E-mail: the-people@email.plala.or.jp
URL: http://npo-thepeople.com/



熊本地震被災者に支援の手を!

4月14日から続く熊本を中心とする地震災害によってお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げると共に、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。



熊本地震の報を受けて、いわき市に住む中高生たちが4月19日から10日間、募金活動のために毎日街頭に立ちました。彼らは、これまで大会が4回に

渡って実施してきた中高生水俣派遣研修事業に参加したメンバーと、派遣研修後に市内での公民館活動などを通して繋がった仲間たちです。市内の様々な学校で学ぶ学生たちが、毎日放課後集まって来ては共に並び声を揃えて呼びかけたのです。

彼らが参加した派遣研修がスタートしたのは、東日本大震災の翌年でした。津波被災者と原発避難者が共生する街で次代を担う若者たちに、多くの学びを伝えることのできる場所として、私たちは熊本県水俣市を選びました。加害企業チッソの関係者と水俣病の患者という異なる立場の人々が共に暮らす街、水俣。そこで、立場の違いを超えて対話を進めることで、地域コミュニティの再生を進めようとした「もやいなおし」の取り組みから多くを学べると考えたからでした。派遣にあたっては、熊本県玉名市に本拠地を置く認定NPO法人れんげ国際ボランティア会が毎回サポートし続けてくださいました。5泊6日の派遣研修期間中に、彼らは熊本県内の各所で様々な学びを重ねました。

研修で訪れた熊本県内の各地が今回の地震によって大きく傷つけられていく様に、彼らは心を痛めたのです。「街頭募金をしたい」と、彼ら自身の中から声が上がりました。毎日、仲間を増やしながら、呼びかける声を大きくしていきました。10日間で集まった浄財は30万円を超えました。これは、全額本会を介してれんげ国際ボランティア会に届けられます。

そのれんげ国際ボランティア会では、現在、被災地で炊き出しを行っています。震災直後から現地入りして情報の収集を行い、さらに資材の準備、ボランティアの呼びかけ、食材の調達などを平行して行い、4月17日より500~600食の炊き出しを開始しているのです。今後もいわきでの震災直後に本会と連携して実施したような「自炊による炊き出し」や避難所での傾聴などの支援を実施することになっています。その活動費として今回の募金は活用していただきます。

なお、ザ・ピープルでもれんげ国際ボランティア会の活動の後方支援のための募金活動を実施しています。詳細はHP (<http://npo-thepeople.com/>) でご確認ください。

都内で初の報告会開催

4月10日、「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト報告会」が、都内で催されます。これは4年間のプロジェクトの歩みと現状、そして今後に向けた展望を報告させて頂く機会にしたいと企画されたものです。



プロジェクトでは、これまで15,000人を超える方々にコットン畑に足を運び栽培のお手伝いを行っていただきました。その中の多くが首都圏からの方々でした。畑で共に汗を流していただきながら、プロジェクトのことをじっくりお話ししていただくことは時間的に難しく、もっと詳しく知りたいとの声が寄せられました。今回の報告会はその声にお応えしたいと企画したものです。

元気に育て!オーガニックコットン

「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」にとって5回目の栽培が始まりました。昨年度はシードコットンで620kgの収量がありましたが、今年はいっとも収量がアップすることを目指して、ピープルコットンチーム4名のスタッフで、週3回の活動日を設けての作業が始まっています。

今年の栽培では、広野町に新しい栽培主体が生まれ、本会としてはサポート役に回れるようになりました。組織の名前は、NPO法人広野わいわいプロジェクト(根本賢仁 理事長)。復興庁の平成27年度新しい東北先導モデル事業を実施する中で生まれた広野町民による自主運営の組織です。



両組織が足並みを揃えて、コットン栽培を福島県浜通りに広げようとしています。

なお、今年度のプロジェクトは、「環境基金」、「[5]のつく日」JCBで復興支援プロジェクト(フィランソロピーバンクを通じた寄付金)、その他の支援を頂きながら進められることになっています。

みんなの畑も動き出しました!!

4月20日、いわき市小名浜上神白にあるコットン畑の一角、「みんなの畑」でのコットン栽培が、今年もスタートしました。今年栽培には富岡町の皆さんだけでなく、大熊町の方も加わり、早速畝立て、マルチ敷きに汗を流しました。



今年は、コットンだけでなく皆で収穫を味わえる作物も栽培しようという声上がり、コットン畑の一部を野菜栽培用に管理することも決まりました。これからコットンと美味しい野菜栽培に月1回の活動を実施する予定です。

小中学校でコットン栽培を!

昨年度末、ふくしまオーガニックコットンプロジェクトでは、コットン栽培を教育現場で生かしていただくためのマニュアルを製作しました。児童生徒用と先生用の2種類があります。コットン栽培が、単なる栽培体験で終わらずに、産業教育・環境教育・震災教育といった意味合いを持った取り組みになることを願って編集したものです。今年度のいわき市内の小中学校15校では、このマニュアルのもとに栽培が行われることになっています。また、今年度はコットン栽培が福島県内にも広がりをを見せています。なお、この事業は地球環境基金の助成により進められます。



4月14日夜9時26分、震度7の激震が熊本を襲った。大抵余震は日を追うごとに縮小してゆくものだが、本震に続く余震が2週間の間1000回を超え、次々と家屋が崩壊していき、そこに住む人々の恐怖と不安はどれほどだろうか。報道を見るにつけ胸が締めつけられ涙が止まらなかつた。熊本は私たちピープルにとっては大恩人である。あの夜その恩人にメールし無事を確認したものの、この先何をどうすべきか考えが浮かばず「無事を祈っています」ありがたう、心強いです」といったメールのやりとりしかできなかった。ところが、東日本大震災で私達が受けた恩を忘れることはできない。津波被害で学校の体育館に避難していた方達に救済物資配付のため校庭を走り回っていた時、声をかけてきたのは、熊本から駆けつけたという「NPO法人れんげ国際ボランティア会」の久家事務局長さんだった。話を伺うと継続して炊き出しの支援をしたいとのこと。願ってもない申し出だった。驚いたことに鍋まな板、包丁その他調理機材一式の見積書も持参されていた。当時、私達の町は放射能の風評被害を心配した住民が次々県外に脱出し、まるでゴーストタウンの様だった。調理機材を揃えるために量販店に走ることも考えたが市内の金物屋が1店だけ営業していることを知り飛び込んだ。60センチの大鍋6ヶ、中鍋6ヶ等々を購入。ガスボンベ3台、ガス台6ヶしめて30万円ですべて取り揃えることができた。それらの準備と同時に支援先を決定することも急がれた。住民自身が取り組むことを条件に3ヶ所をあたるが、3000人を受け入れていた中学校では「そんなに沢山の飯をどうやって炊くか」が問題となり決めかねていた。私は咄嗟に校内で見かけた自衛隊員に声をかけた。意外にも「お安い御用です」と快く引き受けて下さった。こうして3ヶ所での炊き出しが4月1日無事スタートした。避難所が閉鎖になるまでの3カ月間約2万食の提供を滞りなく実施出来たのである。勿論、当時様々な方達の善意によって、数日間の炊き出し支援は各所で行われていた。だがこれほど長期間に渡る支援は異例だったと思う。後日、事務局長さんが当時を振り返り「いわき市の沿岸部の避難所を訪ね歩き、話しかけたが皆さん目の前の事が精一杯で、私の話など聞く余裕は無かつたんですね。あの日支援先が見つからなかつたら九州に帰ろうと思つていました」と語って下さった。その後、れんげさんからの要請があり、機関誌にこの間の経緯を「運命的出会い」と題し寄稿させて頂いた。久家さん達は現在、地元で炊き出し支援を始めた。しかし調味料や野菜が不足しているとのこと。今こそご恩に報いるために本格的な取り組みをしなければと決意した私である。(甘南備)

つぶやき

4月14日夜9時26分、震度7の激震が熊本を襲った。大抵余震は日を追うごとに縮小してゆくものだが、本震に続く余震が2週間の間1000回を超え、次々と家屋が崩壊していき、そこに住む人々の恐怖と不安はどれほどだろうか。報道を見るにつけ胸が締めつけられ涙が止まらなかつた。熊本は私たちピープルにとっては大恩人である。あの夜その恩人にメールし無事を確認したものの、この先何をどうすべきか考えが浮かばず「無事を祈っています」ありがたう、心強いです」といったメールのやりとりしかできなかった。ところが、東日本大震災で私達が受けた恩を忘れることはできない。津波被害で学校の体育館に避難していた方達に救済物資配付のため校庭を走り回っていた時、声をかけてきたのは、熊本から駆けつけたという「NPO法人れんげ国際ボランティア会」の久家事務局長さんだった。話を伺うと継続して炊き出しの支援をしたいとのこと。願ってもない申し出だった。驚いたことに鍋まな板、包丁その他調理機材一式の見積書も持参されていた。当時、私達の町は放射能の風評被害を心配した住民が次々県外に脱出し、まるでゴーストタウンの様だった。調理機材を揃えるために量販店に走ることも考えたが市内の金物屋が1店だけ営業していることを知り飛び込んだ。60センチの大鍋6ヶ、中鍋6ヶ等々を購入。ガスボンベ3台、ガス台6ヶしめて30万円ですべて取り揃えることができた。それらの準備と同時に支援先を決定することも急がれた。住民自身が取り組むことを条件に3ヶ所をあたるが、3000人を受け入れていた中学校では「そんなに沢山の飯をどうやって炊くか」が問題となり決めかねていた。私は咄嗟に校内で見かけた自衛隊員に声をかけた。意外にも「お安い御用です」と快く引き受けて下さった。こうして3ヶ所での炊き出しが4月1日無事スタートした。避難所が閉鎖になるまでの3カ月間約2万食の提供を滞りなく実施出来たのである。勿論、当時様々な方達の善意によって、数日間の炊き出し支援は各所で行われていた。だがこれほど長期間に渡る支援は異例だったと思う。後日、事務局長さんが当時を振り返り「いわき市の沿岸部の避難所を訪ね歩き、話しかけたが皆さん目の前の事が精一杯で、私の話など聞く余裕は無かつたんですね。あの日支援先が見つからなかつたら九州に帰ろうと思つていました」と語って下さった。その後、れんげさんからの要請があり、機関誌にこの間の経緯を「運命的出会い」と題し寄稿させて頂いた。久家さん達は現在、地元で炊き出し支援を始めた。しかし調味料や野菜が不足しているとのこと。今こそご恩に報いるために本格的な取り組みをしなければと決意した私である。(甘南備)